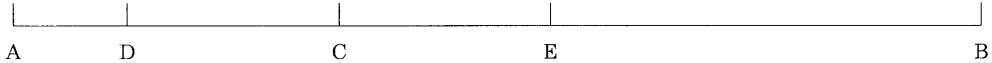


『国家』〈線分の比喩〉を読む

A Reading of the *Line* in Plato's *Republic*

吉田昌市
Shoichi Yoshida

I-1 プラトンの『国家』第6巻の「線分の比喩」(509C-511E)は、すぐ前の「太陽の比喩」で語り残された点を補い、それを語り継ぐという体裁で始められる。



線分 AB を点 C で等しくない部分に二分し、AC が可視界を、CB が可知界を表すとする。これだけであれば、「太陽の比喩」に既出の「見られるもの」「思惟によって知られるもの」を一本の線分上に並べたというだけのことになる。むろん、一本の線分上に並べたということも、意味をもつかもしれないが。

しかし、その点はいまはさておいて、「線分の比喩」の新しい展開が、この AC、CB をもう一度同じ比率で分割するという点にあることは疑いない。こうして得られる AD は影などの「似像」を表し、DC は「いまの似像が似ている当のもの」(510A) を表すとされる。これに対して、可知界の CB を二分して得られる CE と EB については、もはや可視界の場合のような対象の区別ではなく、それぞれを探求するときの探求方法の相違がクローズ・アップされる。CE を探求するものとして挙げられるのは、幾何や算数などの数学的諸学（「いわゆる學術 (hai technai kalumenai)」とも言われる、511C) であり、EB の方は後に「哲学的問答法 (dialektike)」と正式に呼ばれることになるものである。そして比喩の最後では、線分の 4 区分の上に、それに対応する形で 4 つの精神の状態があるとされ、EB には「知性的思惟 (noesis)」、CE には「悟性的思考 (dianoia)」、DC には「確信 (pistis)」、AD には「影像知覚 (eikasia)」が割り当てられる。

これが「線分の比喩」のおおよそであるが、この比喩の眼目はどこにあるのか。それはむろん可知界 CB を二分して得られた CE と EB の区別でなければならないであろうが、では可視界の AD、DC の区別は、比喩のなかでどのような意味あるいは役割をもっているのか。この小論の目的はこのような疑問を念頭に、「線分の比喩」に一つの解釈を下すことにあるが、その際、すぐ前の「太陽の

比喩」や直後の「洞窟の比喩」を始め、『国家』の関連するテキストを「線分の比喩」と照らし合わせ、いわば『国家』によって『国家』を読むという方法を採用したいと考える。それによって「線分の比喩」だけではなく、三つの比喩の全体について、ある程度統一的な理解が得られるのではないかと期待される。

I-2 可視界のAD、DCの区別から始める。ADが「似像」、DCが「似像が似ている当のもの」を表すと言われた直後に、この可視界の区分について、「〈思わくされるもの〉(doxaston)の〈認識されるもの〉(gnoston)に対する関係がそのまま、似像の原物に対する関係と等しくあるように分割されている」(510A)という確認がなされる。これは、事柄自体としてはAD:DC=AC:CBという関係を指すものであるが、しかしここではACが可視界あるいは「見られるもの」とは呼ばれずに、「思わくされるもの」という表現がそれに代わって用いられている。

この「見られるもの」という表現は、「太陽の比喩」(VI. 506B-509B)で一貫して用いられ、かつ線分の比喩の最初(509D)でも、太陽の比喩を踏襲する形でACを表すために用いられた用語である。太陽の比喩は、「見られるもの」の世界(可視界)における太陽の役割を通して、「思惟によって知られるもの」の世界(可知界)における善の役割を語ろうとしたものであって、したがって可視界についての言葉は「比喩」の言葉、可知界についての言葉は「比喩によって表現されるもの」を言い表す言葉だと言うことができよう。そして太陽の比喩において「思わく」という言葉は、「知」や「認識」と対比されているところからも明らかなように、後者の「比喩によって表現されるもの」を言い表す言葉として使われていると言えるであろう。

「それでは、同様にして(目の場合と同様という意味、筆者)魂の場合についても、次のことを心に留めてくれたまえ。——魂が、〈真〉と〈有〉が照らしているものへと向けられてそこに落ち着くときには、知が目覚めて(enoesen)そのものを認識し(egno)、その魂は知性(nus)をもっているとみられる。けれども、暗闇と入り混ったもの、すなわち、生成し消滅するものへと向けられるときは、魂は思わくする(doxazei)ばかりで、さまざまの思わく(doxai)を上を下へと転変させるなかで、ぼんやりとしかわからず、こんどは知性をもっていないのと同じようなことになる」(508D)

さらに、ここに見られる知や認識と思わくとの対比は、『国家』でアイデア論が最初に提示される第5巻末(475E ff.)の議論を前提しているものであり、太陽の比喩や線分の比喩の中の「思わく(doxa)」という言葉やその派生語は、この5巻末の議論に基づいて理解されるべきものである。

第5巻末でアイデア論に基づいて「知識(gnome)」(476D)と「思わく」とが厳格に区別され、あるものは知識の対象「知られるもの」であり、ありかつあらぬものは思わくの対象「思わくされるもの」である、という点が確認される。そして第6巻の、太陽の比喩が語られるところで(507AB)アイデア論がもう一度提示される訳であるが、そのときは、アイデアと対置されるものは「思わくされるもの」ではなく「見られるもの」と呼ばれている。しかしこれは太陽の比喩の内容から自然に要請されることであって、線分の比喩の、いま問題にしている箇所では、「思わくされるもの」という言い方がされるのは、また元の表現に帰ったものということになる。

I-3 ここから、太陽の比喩と線分の比喩とが、比喩としての性格を異にするのではないかという点に思い至る。先にも述べたように、太陽の比喩では、可視界に君臨する太陽が可知界における善の比喩としての役割を果たしていた。太陽は善の「子供」とも言われており（508B）、その点で善と太陽、可知界と可視界の間には実体的なつながりが想定されるが、しかしそのような実体的つながりの有無が比喩としての機能を左右するわけではない。可視界は可知界の単なる比喩なのである。これに対して、線分の比喩において、「思わくされるもの」つまり AC が「認識されるもの」つまり CB の、単なる比喩であるとは考えられない。AC あるいは AC を二分してできた AD、DC についてのテキストの記述は、CB あるいはその部分である CE、EB についての記述より、はるかに情報量が少ないからである。むろん、 $AC : CB = AD : DC = CE : EB$ という比例関係は存在する。しかし比例関係は双方向的であって、比喩の場合のように一方向的ではない。そして、「思わくされるもの」あるいは「見られるもの」と「認識されるもの」あるいは「思惟によって知られるもの」とを、一本の線分の部分として表すという、線分の比喩の仕掛の意味も、ここにあるのであろう。線分の比喩において、この両者は、単なる比喩の場合のようなアナロジカルな関係ではなく、異なっているが、しかし同種の存在の部分どうしとして実体的なつながりをもつ。事実、線分間の比例関係を言い表すにあたって、「相互に比較した場合のそれぞれの明確さと不明確さの度合いに応じて」（509D）「真実性の有無の度合いに応じて」（510A）「これらの精神状態は、それぞれの対象が真実性にあずかっているのに対応して、ちょうどそれと同じ度合いで明確性にあずかっている」（511E）などと言われているのが、その証拠になる。

こうして、「思わくされるもの」あるいは「見られるもの」と「認識されるもの」あるいは「思惟によって知られるもの」という両者を一本の線分上に配置するということが、線分の比喩の比喩たる所以のものであることが知られる。そして、線分という数学的装置の採用は、AC と CB を再度同じ比率で分割することによって得られる比例関係の利用を可能にするのである。

さてその比例関係であるが、AC の下位線分 AD と DC が似像とその原物を表すことは既に見たが、しかし AD と DC についてはこれがテキストの記述のすべてなのである。したがって、この「似像と原物」という関係が、AC と CB にも、また CB の下位線分である CE と EB にも、何らかの意味で当てはまらなければならないことになる。

II-1 周知のように線分の比喩のあとには「洞窟の比喩」（VII. 514A-518B）が続くが、この比喩が一通り語られたあと、これを「先に話した事柄に結びつけ」（517B）ることが行われている。洞窟の比喩を「全体として」（517B）先の事柄に結びつける、という言い方や、結びつけた結果が本当にこの通りかどうかは「神だけが知りたもう」（517B）という、プラトンの著作によく見られる留保からは、この結びつけの試みが比喩の細部に至るまでの精確な対応を意図するものではないことが窺われる。それを予め承知の上で、この結びつけの試みにつきあい、かつ我々自身でもそうした試みを少し行ってみたいと考える。

テキストに与えられている結びつけは、次のようなものである。

「a）視覚を通して現われる領域というのは、b）囚人の住いに比すべきものであり、c）そ

の住いのなかにある火の光は、d) 太陽の機能に比すべきものであると考えてもらうのだ。そして、e) 上へ登って行って上方の事物を観ることは、f) 魂が〈思惟によって知られる世界〉へと上昇して行くことであると考えてくれれば、ぼくが言いたいと思っていたことだけは——とにかくそれを聞きたいというのが君の望みなだからね——とらえそこなうことはないだろう」(517B)

a) b) などは筆者が便宜上挿入したものだが、b) c) e) が洞窟の比喩を指し、a) と d) は太陽の比喩を指すことは明らかである。a) は太陽の比喩とのつながりで線分の比喩のことでもあると考えてもよいだろう。a) と b)、c) と d) の対応に疑問の余地はない。問題があるとすれば、e) と対応するとされている f) である。「魂が思惟によって知られる世界へと上昇して行く」ということは、太陽の比喩はもちろん線分の比喩にも言われていないと思われるからである。

しかし我々は、線分の比喩において「見られるもの」と「思惟によって知られるもの」とが一本の線分の部分として表されていること、両者が異なっているが、同種の存在の部分どうしとして実体的なつながりをもつことを確認したはずである。だから、魂の上昇ということも、太陽の比喩の圏内では考えられないことだとしても、線分の比喩では十分に可能なことであると言えよう。線分の比喩のテキストで、CEの探求について最初に与えられている説明のうちの「先の場合には原物であったもの(DCのこと、筆者)をこの場合には似像として用いながら」(510B)という言い方も、DCつまりは「見られるもの」あるいは「思わくされるもの」と「思惟によって知られるもの」との、探求する魂にとっての一種の連続性を、したがって魂の可視界から可知界への上昇を示唆すると解することができるであろう。

II-2 次に、我々が行おうとする結びつけの試みであるが、それは洞窟の比喩をもっと直接に線分の比喩につなげるといえるものである。線分の比喩にはAD、DC、CE、EBという4部分が区別されるが、洞窟の比喩も次のような四つの部分に、比較的無理なく分けることができるからである。

- 1 : 洞窟内に縛られて、この住居のなかの道具や像の「影 (skia)」しか見ることができない囚人の段階。
- 2 : 解放され振り返って、その影を投ずる実物や火を見る段階。
- 3 : 洞窟の外の世界へと昇って行って、上の世界の影やその他の映像を見る段階。
- 4 : 外の世界の実物や太陽そのものを見る最終の段階。

哲学者には、もう一度洞窟へと降りて行き、囚人たちと一緒に住むという第五の段階が加わるが、これは今の場合は考慮する必要はないだろう。

もし洞窟の比喩に上のような四つの段階を区別することが許されるなら、この四つを線分の四部分と一対一に対応させることができるのではないだろうか。線分のADとDCは影などの似像とその原物であったが、それを比例式によって拡張した「影と原物、影と原物」というシェーマは、上のように区分された洞窟の比喩にもそのまま当てはまるからである。

しかし、このような一対一対応には、実は大きな困難がある。洞窟の比喩においては、影しか見ることのできない囚人の状態から解放され、洞窟内の実物を見るようになることは、1か

ら2、2から3、3から4という三段の変化のうちでも最もドラスティックな、また最も意味深い変化であると考えられるが、線分の比喩において似像を見ることからその原物を見ることへの変化は、その原物が「われわれの周囲にいる動物や、すべての植物や、人工物の類いの全体」（510A）のことである点をわざわざ引き合いに出すまでもなく、あまり重大な変化ではないからである。

また、第7巻で哲人王養成のための教育プログラムが論じられるなかで、洞窟の比喩の云わば脱比喩が行われているが、それを見ると、まず教育の最終課程である「哲学的問答法」について

「それは思惟によって知られるものであるけれども、比喩的にこれを再現しようと思えば、先に述べた視覚の機能に比せられてよいだろう。すなわち、すでにして実物としての動物のほうへ、天空の星々のほうへ、そして最後には太陽そのもののほうへと、目を向けようとつとめるとわれわれが語った、あの段階がそれである」（532A）

と述べられ、続いて、「われわれがこれまで述べてきたいくつかの学術」について

「他方また、縛めから解放されて、うつっている影から、その影の元にある模像と火の光のほうへ向きを変え、地下の住いから太陽のもとへと上昇して行くこと、そしてそこまで昇ってから、動物や植物や太陽の光を直視することはまだできずに、水にうつったその神的な映像と影とに（中略）視線を向けること、こういった段階があった。われわれがこれまで述べてきたいくつかの学術を研究することは、全体として、ちょうどこれに相当するような効果をもっているわけであって（後略）」（532BC）

ということが言われている。後の引用中の「いくつかの学術」とは数と計算、幾何学、立体幾何学、天文学、音楽理論（音階論）の五つであり、これらは「哲学的問答法」のための補助的準備的学科たる数学的諸学科に他ならない。

これらの引用によれば、我々が上で洞窟の比喩の第二、第三の段階として区別したものが、区別されず一まとめにして数学的諸学に対応させられ、我々の第四の段階が「問答法」に対応させられていることになる。テキストに従うかぎり、洞窟の比喩は4段階ではなく3段階に分けられるのである。上で我々が区別したときの番号をそのまま使うと、1、2+3、4の三つである。そしてこれを線分の比喩と結びつけると——結びつけの試み自体は、テキストにおいても行われているのであるから——4がEBに、2+3がCEに対応し、1はAC(AD+DC)に対応するということになる。

II-3 以上のように線分の比喩を洞窟の比喩と結びつけ、洞窟の比喩に照らして読むと、線分の比喩における可知界の2区分にはそれらを区別する意味を見出すことができるが、可視界の2区分はそれ自体としてはあまり意味がないということになる。そして同じことは、可視界の2区分に対応する精神の状態である「影像知覚」と「確信」の区別にも言えることになる。むろん、線分の比喩と洞窟の比喩はその意図も目的も異なるはずであるから、このようなことがあっても別に異とするには足りないかもしれないが、しかし事柄自体を考えると、線分の比喩におけるAD（可視界の影や似像）からDC（その原物）への視線の転換にはほとんど意味を認めることはできないのに対し、洞窟の比喩の意味における影から実物への転換は、後に（518B-519B）魂全体の向け変えとして語られることになるような重大な意味をもつことは明らかである。したがって、線分の比喩における可視界の2

区分は、それを他と関連させることなくこの比喻の中だけのことに留め、比例式を介して、可知界の CE と EB とを似像と原物、影と原物という仕方に関係づけるという点だけに、その役割を限定して考えるべきであろう。

Ⅲ-1 可知界の CE と EB とが「似像と原物」「影と原物」であるということの意味を考える前に、まずは CE と EB それ自身についてのテキストの記述を見ることにする。

「それの一方の部分〔CE〕は、魂（精神）がそれを探求するにあたって、先の場合には原物であったものをこの場合には似像として用いながら、仮設（前提）から出発して、始原へさかのぼるのではなく結末へと進んで行くことを余儀なくされる。これに対して、もう一方のもの〔EB〕の探求にあたっては、魂（精神）は仮設から出発して、もはや仮設ではない始原へおもむき、また前者〔CE〕で用いられた似像を用いることなしに、直接〈実相〉そのものを用い〈実相〉そのものを通じて、探求の行程を進めて行くのだ」（510B）

これが両者あるいは両者の探求方法の違いについての最初の説明である。つまり、a) 幾何の問題を解くときのように、「目に見える形象を補助的に使用」（510D）しながら探求するか否か、b) 仮設から出発して結末（結論）へと論証的に進むか、論証の出発点である仮設のさらに上へとさかのぼって「もはや仮設ではない始原」へと向かうかという、二点において両者は区別される。

しかしこうした探求のあり方がどう評価されるかという点では、a) b) 二つの相違は同じ比重をもってはいないようである。CE の探求にとっては

「さまざまの仮設がそのまま始原にほかならないのであって、考察にたずさわる人々は、感覚ではなく思考を用いて対象を考察しなければならないけれども、しかし彼らは始原にまでさかのぼって考究するのではなく、仮設から出発して考察するがゆえに、あなたの見るところでは、対象についてほんとうの〈知 nous〉をもつに至らないのです（中略）。そして私には、あなたは幾何やそれに類する学術にたずさわる人々のこうした心のあり方を、〈悟性的思考 dianoia〉と呼んで、〈知性的思惟 nous〉とは区別しておられるように思われます——ちょうど〈思わく doxa〉と〈知性 nous〉との何か中間的なところに、そのような〈思考 dianoia〉が位置づけられるという見方のもとに」（511CD）

とされているからである。

つまりここでは、CE の探求が対象について知をもつに至らないのは、もっぱら b) の点にのみ拠るとされているのであって、a) については、CE の探求も（「目に見える形象を補助的に使用」しはするものの、）基本的にはその考究は感覚ではなく、思考によってなされると、先とはむしろ反対のことが言われているのである。したがって、CE と EB の相違についての上記の二点は、少なくとも CE の探求の評価に関する限り、同じ資格、同じ重要性のものではないことになる。こうして、CE の探求（幾何等の諸学術）が知性的思惟の下位に立ち、「思わく」と「知性」との中間という位置づけを与えられねばならない理由は、探求の出発点に置いた仮設を「あたかも万人に明らかであるかのように」（510D）「もはや何ひとつその根拠を説明するにはおよばないと考え」（510C）と一点のみにあることとなる。

なお「〈思わく doxa〉と〈知性 nous〉との何か中間的なところ」（511D）という引用中の「思わく」や「知性」は、これまた第5巻末の議論を引き継いだ用語であることを確認しておこう。

Ⅲ-2 以上のように、線分の比喩においては、CEの探求すなわち数学的諸学の探求が、EBの探求すなわち哲学的問答法のそれと比べて下位に置かれているのを見たわけであるが、しかし数学的諸学に対する評価はけっして一方的に否定的なものではない。第7巻で先に洞窟の比喩の「脱比喩」として引いた箇所では、数学的諸学について

「われわれがこれまで述べてきたいくつかの学術を研究することは、全体として、ちょうどこれに相当するような効果をもっているわけであって」

という先にも引用した言葉のあと、引き続いて

「それは、魂のうちなる最もすぐれた部分を導いて、実在するもののうちなる最もすぐれたもの（＝〈善〉、筆者）を観ることへと、上昇させて行くはたらきをするものなのだ」（532C）

という肯定的積極的な評価が与えられているのである。これは、先にも触れたように、哲人王を養成するための教育プログラムを作るなかで、最終の課程である「哲学的問答法」への補助的準備的学科として数学的諸学を位置づけようとするものである。

『国家』の知的教育論は、別のコンテキストで先にも言及したように、「魂の向け変え」という特別な考え方に立つものであって、

「ところがしかし、いまのわれわれの議論が示すところによれば、ひとりひとりの人間がもっているそのような〔真理を知るための〕機能と各人がそれによって学び知るところの器官とは、はじめから魂のなかに内在しているのであって、ただそれを——あたかも目を暗闇から光明へ転向させるには、身体全体といっしょに転向させるのでなければ不可能であったように——魂の全体といっしょに生成流転する世界から一転させて、実在および実在のうち最も光り輝くものを観ることに堪えうようになるまで、導いて行かなければならないのだ」（518C）

という引用からも知られるように、「洞窟の比喩」に立脚しつつ、「生成するものから実在するものへと魂を引っぱって行く力」（521D）をもつ学問を要求する。

しかし、このような条件を満たす学問は、何らかの形で「生成するもの」と「実在するもの」の双方に関わるものでなければならぬであろう。これは「魂の向け変え」という理念の要請するところでもあるし、またこの点は、何が求められる学問かを一般的に論じる箇所（521C-524D）でも、例えば

「感覚に与えられるものの中で、そのあるものは、感覚だけでじゅうぶんに判別されるというわけで、それをよくしらべるために知性の活動を助けに呼ぶことはない。しかしまた場合によっては、感覚は何ひとつ信頼できるものを与えないというので、それをよくしらべるように全面的に知性の活動を命じ促すものもあるのだ」（523AB）

という区別立てのうちに、「感覚」と「知性の活動」の双方を要求するものという形で、言葉は違っているがやはり要請されていることなのである。「感覚」の与える情報が正反対のものである場合、魂は困惑して「知性の活動」を助けに呼ぶのである（524A, E 参照）。

とすれば、数学的諸学がこの条件を満たすのは、「線分の比喩」において数学について指摘された「目に見える形象を補助的に使用」(510D) するということがあるからに他ならないのではないか。もう少し詳しく述べるなら、

「彼らは目に見える形象を補助的に使用して、それらの形象についていろいろと論じる。ただしその場合、彼らが思考しているのは、それらの形象についてではなく、それを似像とする原物についてなのであり、彼らの論証は四角形そのもの、対角線そのもののためになされるのであって、図形に描かれる対角線のためではなく、その他同様である」(510DE)

という引用が示すように、目に見える図形を用いながら、しかし目には見えず「思考によってしか見ることのできないようなかのものを、それ自体として見ようと求めている」(510E-511A) からなのである。

我々は、線分の比喩において、数学と哲学的問答法とが a) 探求にあたって目に見える形象を用いるかどうか、b) 仮設から結論へと進むか、それとも「もはや仮設ではない始原」へと向かうか、の二点で区別されているのを見、かつ、問答法が最上位に、数学がその下に位置づけられるのは、もっぱら b) の点だけによることを確認したのであるが、もし上に述べたことが正しいとすると、このような b) の観点からする否定的消極的な取り扱いのほかに、「洞窟の比喩」に基づく、教育の具体的プログラム作りというコンテキストのなかでは、数学は a) の観点のもとにむしろ肯定的積極的に取り扱われていることになる。

Ⅲ-3 しかしながら、数学が i) 目に見える形象を使用しつつ、ii) しかし目には見えず「思考によってしか見ることのできないようなかのものを、それ自体として見ようと求めている」(510E-511A) と言われるとき、この i) と ii) のうちのどちらが数学を数学たらしめる本質的性格なのであろうか。それとも、この i) と ii) の両方が数学の本質を成すのであろうか。もし i) がそうであるとすれば、探求にあたって目に見える形象を使用するということは、いつになっても数学から取り去ることのできない性格であるということになるが、これは事柄自体として考えられないことであろう。テキストにも、数学者は目に見える形象を「補助的に使用する (pros-chrontai)」(510D)、直訳すれば「付け加えて使用する」とあるのである。あるいは逆に、だから pros-chrontai の pros はやはり無視することができない、と言ったほうが正確であろうか。

とすれば、数学の本質的性格は i) ではなく ii) に求める他はないということになるが、ii) の性格は当然、哲学的問答法にも備わっているはずであるから、では何故に「魂の向け変え」のために特に数学が必要とされるのかが、今度は疑問となる。我々は先に、「魂の向け変え」のためには、「生成するもの」と「実在するもの」の双方に関わる学科、「感覚」と「知性の活動」の両方を必要とする学科が求められると考えたのであるが、それも間違いだったことになるのかもしれない。「生成するもの」、それはむしろ「思わくされるもの」であり「見られるもの」であるのだが、われわれ人間は、まさにこの生成するもの、見られるもの世界の一部分として、「思わく」を我々の精神の常態としてつつ存在しているのである。したがって、「生成するもの」との関わりは、我々にとって所与のことであって、そのために特に数学を必要とはしないであろう。数学を抜きにして、直ちに「哲学的問答

法」を学べばよいのではないか。

Ⅲ－４ しかし、こと「線分の比喩」の解釈に関するかぎり、これはさほどの困難ではない。以前に考えた通り（Ⅲ－１）、数学にとっては

「さまざまの仮設がそのまま始原にほかならないのであって、考察にたずさわる人々は、感覚ではなく思考を用いて対象を考察しなければならないけれども、しかし彼らは始原にまでさかのぼって考究するのではなく、仮設から出発して考察するがゆえに、あなたの見るところでは、対象についてほんとうの〈知 nous〉をもつに至らないのです」（510CD）

という点を、数学が批判されなければならない理由とし、目に見える形象を使用するという点については、「目に見える形象の使用」とは空間的直観を働かせることであり、この直観が仮設が自明であるという意識を強化し補完する、つまり「始原にまでさかのぼって考究する」ことを妨げると考えればよいことになる。（この点は Richard Robinson, *Plato's Earlier Dialectic* (Second Edition), Oxford, 1966, pp.155－156に拠る。なお、510B 4 の chromene を「用いるがゆえに」と強く読めば、だから始原へではなく結末へ進むことを余儀なくされる、という意味をテキストからも引き出すことができる。）そして、「線分の比喩」の目的は、数学すなわち CE の探求を批判することを通して、EB の探求すなわちプラトンが哲学そのものと考えた「問答法」の意義を宣揚することにあったのだと。

第 7 巻の教育プログラムの脈絡においても、

「あらゆるものについて筋道の通ったやり方で、それぞれのもの自体がまさに何であるかを把握しようとするには、先に述べたいくつかの学術（数学的諸学を指す、筆者）のほかに、何か別の探求の道がなければならぬということだ。これに対して、他の一般的な技術なるものはすべて、人間の思わくや欲望に対してその狙いを向けるものであるか、あるいは、自然物の生成や人工物の組立てといったことに関わるものであるか、あるいは、そのようにして生じたり組み立てられたりするものの世話をすることにすべてが向けられているかの、いずれかである。残るのは、ある程度実在に触れるところがあると言われた幾何学、およびそれにつづく諸学術であるが、（後略）」（533B）

という言葉の後、それら数学的諸学が「線分の比喩」のときと同じ理由で批判され、その批判点を克服するものとして、「何か別の探求の道」すなわち「哲学的問答法」に言及されているが、この引用は、当時の技術や学術一般に対する著者の見方、評価の仕方を物語るものとも見ることができるであろう。すなわち、数学はプラトンが「ある程度実在に触れるところがある」と評価できるものとして当時すでに存在しており、そうした事実の上に立って、プラトンは数学に対する批判を介して「哲学的問答法」を賞揚したのである。「線分の比喩」および第 7 巻におけるプラトンの数学についての発言が、数学が当時置かれていた状況を反映したものであることについては、「立体幾何学」に関するテキストの記述が傍証となるであろう（VII. 528A－E を参照）。

「線分の比喩」における数学の取り扱い方について、いま上に述べたような一面のあることを否定はできないであろう。繰り返しになるが、数学は「ある程度実在に触れるところがある」ものとして、

否むし「ある程度しか」実在に触れていないものとして、当時存在していたのであって、こうした事実を基礎として「線分の比喩」は書かれたのである。事実また、「線分の比喩」では、数学的諸学術について

「ただしそれらの対象は、ひとたび始原と関係づけられるならば、それとともに知性による把握のもとにおかれるものではあるけれども (kaitoi noeton onton meta arches)」(511D) ということが言われていて、「ある程度しか」実在に触れないというのが、当時の数学のたまたまのあり方にすぎなかったこと、あるいは少なくとも著者プラトンはそう考えていたことが示唆されている。

しかし、この引用は、数学が「悟性的思考」というあり方を脱して、「知性的思惟」の域にまで至りうることを示すのであって、その暁には、たとえ数学が依然として「目に見える形象を補助的に使用する」ところから出発するとしても、もはや数学と哲学的問答法とを実質的に区別することはできないであろう。両者ともに「感覚ではなく思考を用いて対象を考察し」(511C) かつ「始原にまでさかのぼって考究する」(511CD) という点では変わりがなからである。これを問答法の数学化と解することもできるかもしれないが、いまは「線分の比喩」の趣旨に則って数学の問答法化（数学の、問答法の下への統合）とするとすれば、これは数学というものの不安定な位置づけ、「〈思わく〉と〈知性〉との何か中間的なところに」(511D) あって、やがては消えて行かざるをえない一時的なあり方を示すということになるかもしれない。むしろ、先にも言ったように、「線分の比喩」の解釈としては、これで構わないのである。CE と EB の区別はやがて解消し、可知界一般を表す CB だけが残るということである。

我々は先に (II-3)、可視界の線分 AC の二区分、AD と DC の区別にそれほどの意味を見出すことはできないと述べたのであるが、理由は異なるけれども、可知界の二区分もそれほど固定的なものではないということになった。「思わくされるもの」と「認識されるもの」、「見られるもの」と「思惟によって知られるもの」という区別だけが残ることになる。

この区別は、プラトンのイデア論にとって本質的な区別立てであり、第5巻末においても、そしてそれを踏まえる形で「太陽の比喩」においても見出され、また「洞窟の比喩」においても、囚人の状態とそれから解放された後の状態の区別として表されていたものである。解放後のあり方のなかには、数学的諸学と問答法の二つに当たるものが区別されていたけれども、両者の区別が固定したものではないことは、上に述べた通りである。こうして、「思わくされるもの」と「認識されるもの」、「見られるもの」と「思惟によって知られるもの」という区別が一貫していることになる。

しかし、このように言うことは、「線分の比喩」の比例式、 $AC : CB = AD : DC = CE : EB$ を「似像（あるいは影）：原物」という観点から考える試みを、すぐに無意味にするものではないであろう。しかし、これはもう少し後に回さなければならない。

IV-1 我々は先に (III-3)、目には見えず「思考によってしか見ることのできないようなかのものを、それ自体として見ようと求める」(510E-511A) という点においては、数学も哲学的問答法も同じであると考え、生成消滅するものの世界、見られ思わくされるものとの関わりが我々にとっ

て所与のことであるとすれば、「魂の向け変え」のためには特に数学を必要とはせず、直接に問答法から始めてもよいのではないかと問うた。そして「線分の比喩」に関しては、数学の介在する理由を与えることができたが（Ⅲ－４）、しかしそれは、線分の比喩において数学が、哲学的問答法との対比によって専ら否定的に見られているからであった。しかしながら、第7巻での数学に対する肯定的積極的な評価は、これだけでは説明されないのであって、我々は改めて、この肯定的積極的な評価の理由あるいは根拠となるものが何かを、換言すれば「魂の向け変え」のために数学が必要とされる理由が何かを問題にしなければならない。

一つの答えは、これもまた、先とは違う意味で、事実の問題ではないかということである。哲学的問答法は、言うまでもなく、「見られるもの」ではなく「思惟によって知られるもの」に、「思わくされるもの」ではなく「認識されるもの」に、つまりイデアに関わる。しかし、『国家』でイデア論が最初に提示される第5巻末の議論によれば、イデアの存在は、誰によってもすぐに認められるというものではなく、それを認めさせるのに説得を要するような事柄なのである（475E－476E 参照）。それに対して、数学が、目に見える形象を補助的に用いながら、しかし「思考によってしか見ることのできないようなものを、それ自体として見ようと求め」（VI. 510E－511A）るものであることは、少しでも数学を学んだことのある者ならすぐに認めるであろう。イデアの存在は、数学という学問の存在によって最も有効に、最も容易に証しされる。数学は最もすぐれた、最も有効なイデアの世界への導入なのであり、この意味において、数学的諸学は、哲学的問答法の補助的準備的学科たりうるであろう。

ちなみに、第7巻で哲学的問答法の補助的準備的学科として名前の上がっている、数と計算、幾何学、立体幾何学、天文学、音楽理論（音階論）の5学科のうち、線分の比喩でも言及されているのは前二者であるが、この二つが、当時すでに、真に「思惟によって知られるもの」を対象とする学問として成立していたことは、第7巻の記述によって知られるであろう（525D－526A, 527AB 参照）。これに対して、天文学と音楽理論については、それは将来の課題として語られているのである（529A－530C, 530E－531C 参照）。

IV－2 もう一つの答えがあるとすれば、それは次のような方向で考えることができる。我々はこれまで、数学的諸学や哲学的問答法が「思惟によって知られるもの」を対象とするといいながら、その対象がいかなるものかについては、まったくと言っていいほど触れてこなかった。我々は数学や問答法をただ純粹思考の営みとして考えてきたことになる。そして純粹思考の営みという点では、数学も問答法も、仮設から出発してどこへ向かうかを除けば、違いはなかったのであり、この向かう方向の相違からは、数学に対する積極的な評価は出てこなかったのである。とすれば、問答法への補助的準備的学科とされている数学的諸学の知の対象の側に、そうした積極的な評価の理由を求めることができるのではないか。まずは、関連すると思われるテキストをすべて列挙することから始める。

- 1) 「しかしほんとうに重大な点、容易には信じがたい点は、こうした学問（天文学などを指す、筆者）のなかで各人の魂のある器官が浄められ、ふたたび火をともしられるということだ。この器官は、ほかのさまざまな営みのために破壊され、盲目にされているものであって、これを健全に保

つことは、何万の肉眼を保全するよりも大切なことなのだ。ただこの器官によってのみ、真理は見られるのだからね」(VII. 527DE)

- 2) 「天空にあるあの多彩な模様〔星〕は、それが目に見える領域にちりばめられた飾りであるからには、このような目に見えるもののうちではたしかに最も美しく、最も正確ではあるけれども、しかし真実のそれとくらべるならば、はるかに及ばないものと考えなければならないということだ。真実のそれとはすなわち、真に実在する速さと遅さが、真実の数とすべての真実の形のうちに相互の関係において運行し、またその運行のうちに内在するものを運ぶところの、その運動のことであって、これらこそは、ただ理性(ロゴス)と思考によってとらえられるだけであり、視覚によってはとらえられないものなのだ」(VII. 529CD)
- 3) 「それならば、真の天文学者は(中略)、天空の造り主が天空と天空内にある一切とを、およそこの種の作品としては可能なかぎり最も美しい出来栄えとなるように形づくったということは、すすんでこれを認めるだろう。しかし、夜が昼に対して、昼夜が月に対して、月が年に対して、そしてその他の星々がこれらに対しまた相互に対して、いかなる正確な数的割合にあるかという問題についてはどうだろう? 真の天文学者ならば、これらのものが——物体を備えた目に見える存在であるにもかかわらず——つねに斉一なあり方を保って進行しつづけ、けっしていささかも逸脱することがないと考える人、そしてそれについての真理をあらゆる手段をつくしてそこに求めようとする人を、奇妙な考えの人であるとみなすだろうと、君は思わないかね?」(VII. 530AB)
- 4) 「というのは、あの人たち(ピュタゴラス派、筆者)は天文学をやっている連中と同じことをしているからだ。つまり彼らは、耳に聞えるこの音の協和の中に直接に数を探し求めるけれども、しかしそれ以上のぼって問題を立てるところまでは行かず、どの数とどの数とがそれ自体として協和的であり、どの数とどの数とがそうでないか、またそれぞれは何ゆえにそうでありそうでないかを、考察しようとししないのだ」(VII. 531BC)
- 5) 「ところで、ぼくはまた思うのだが、すべてこれまで述べてきたような事柄の研究(数学的諸学科を指す、筆者)は、そうした学科相互の間の内的な結びつきと同族的な関係とを見てとるところまで進んで、それらがどの点で互いに親近なつながりをもつかを、総合的な見地から勘考するところまで行かなければならない。そうしてこそはじめて、これらの学科を業としてはげむことは、われわれの目指す目的のために何らかの役に立つことになり、その間の骨折しもむだではなかったことになるが、もしそうでなければ、むだ骨折しということになるだろう」(VII. 531CD)
- 6) 「その若者たち(20歳の若者のなかから予選された者たち、筆者)は、少年時代の教育においてばらばらに雑然と学習したものを総合して、もろもろの学問がもっている相互の間の、また実在の本性と、内部的な結びつきを全体的な立場から総観するところまで行かなければならない」

(VII. 537C)

「のみならずまた、これは、哲学的問答法に適した素質であるかどうかを試すための、最も重要な決め手となるものだ。なぜなら、総合的な視力をもつ者は、哲学的問答法的能力をもつ者であり、そうでない者は、その能力のない者だから」(VII. ibid.)

(537CDによれば、こうした総合的研究は10年間続く。筆者)

今度は、哲学的問答法の知の対象がどのようなものと考えられているかについて、これまた関係すると思われる箇所を、すべて列挙してみる。これまでの所、その究極の対象が〈善〉であるということだけが、我々の知るところである。

- i) 「じっさい、アデイマントス、いやしくもほんとうにみずからの精神を真實在のもとに置く者ならば、目を下のほうに向けて世俗事に気をとられ、人間たちと争って嫉妬と悪意で心をいっぱいにするような、そんな暇などは、けっしてないだろうからね。いや、彼は、整然として恒常不変のあり方を保つ存在にこそ目を向け、それらが互いに不正をおかしおかされることなく、すべて秩序と理法に従うのを観照しつつ、それらの存在にみずからを似せよう、できるだけ同化しようとつとめることに、時を過すだろう」（VI. 500BC）
- ii) 「それなら同様にして、認識の対象となるもろもろのものにとっても、ただその認識されるということが、〈善〉によって確保されるだけでなく、さらに、あるということ・その実在性もまた、〈善〉によってこそ、それらのものにそなわらようになるのだと言わなければならない——ただし、〈善〉は実在とそのまま同じではなく、位においても力においても、その実在のさらになたに超越してあるのだが」（VI. 509B）
- iii) 「思うにそのようにしていったら、最後に、太陽を見ることができるようになるだろう。（中略）そしてそうなると、こんどは、太陽について次のように推論するようになるだろう、——この太陽こそは、四季と年々の移り行きをもたらすもの、目に見える世界におけるいっさいを管轄するものであり、また自分たちが地下で見ていたすべてのものに対しても、ある仕方での原因となっているものなのだ、と」（VII. 516BC）
- iv) 「知的世界には、最後にかろうじて見てとられるものとして、〈善〉の実相（イデア）がある。いったんこれが見てとられたならば、この〈善〉の実相こそあらゆるものにとって、すべて正しく美しいものを生み出す原因であるという結論へ、考えが至らなければならぬ。すなわちそれは、〈見られる世界〉においては、光と光の主を生み出し、〈思惟によって知られる世界〉においては、みずからが主となって君臨しつつ、真実性と知性とを提供するものであるのだ、と」（VII. 517BC）
- v) 「そこで、哲学的問答法の探求の行程だけが、そうした仮設をつぎつぎと破棄しながら、始原（第一原理）そのものに至り、それによって自分を完全に確実なものとする、という行き方をするのだ。そして、文字どおり異邦の泥土のなかに埋もれている魂の目を、おだやかに引き起して、上へと導いて行くのだ——われわれが述べたもろもろの学術を、この転向（向け変え）の仕事における補助者としてまた協力者として用いながらね」（VII. 533CD）

IV-3 以上の諸引用を照らし合わせることで、数学的諸学の対象と哲学的問答法のそれとの間に、何か共通するものが見出されるかどうか、それを考えてみよう。

2) の「真に実在する速さと遅さが、真実の数とすべての真実の形のうちに相互の関係において運行し、またその運行のうちに内在するものを運ぶところの、その運動」、それは「つねに齊一なあり方を保って進行しつづけ、けっしていささかも逸脱することがない」ものであり、「ただ理性（ロゴ

ス)と思考によってとらえられるだけであり、視覚によってはとらえられないもの」なのであるが、これが、天空にある可視的な天体の運動を「模型」(529D)として用いることにより把握することが期待されている、天文学の真の対象である(2)、3))。そして、天文学などの数学的諸学は、総合されて「相互の間の、また実在の本性との、内部的な結びつきを全体的な立場から総観する」(下線部、筆者)ところまで進まなければならないとされている(5)、6))。

他方、問答法の対象については、まず i) と ii) を考えてみよう。i) は「真実在」(イデア)が「整然として恒常不変のあり方を保」ち、「互いに不正をおかしおかされることなく、すべて秩序と理法に従う」存在であることを述べたものであるが、ii) の、〈善〉が認識の根拠であるばかりでなく存在の根拠でもあるという、有名な「太陽の比喻」の一節を考え併せるなら、真実在の示す「秩序と理法」(kosmoi kai kata logon echonta, 500C) がその〈善〉に由来するものであると、自然に考えることができるであろう。iii) の「この太陽こそは、四季と年々の移り行きをもたらすもの、目に見える世界におけるいっさいを管轄するものであり……」という比喻の言葉、iv) の「この〈善〉の実相こそはあらゆるものにとって、すべて正しく美しいものを生み出す原因である」という言葉も、これとつなげて理解することは可能であろう。

そしてもし、〈善〉を中心として「秩序と理法」に従う真実在の世界のあり方と、「つねに斉一なあり方を保って進行しつづけ」「ただ理性(ロゴス)と思考によってとらえられるだけであ」ところの、真の天文学の対象との間に、ある類同性を見ることが許されれば、それで我々の目的は達せられたことになる。なお、1) の、天文学を学ぶことで「魂のある器官が浄められ、ふたたび火をともしられる」ということと、v) の、問答法の探求の行程が「文字どおり異邦の泥土のなかに埋もれている魂の目を、おだやかに引き起して、上へと導いて行く」ということとの間にも、使われているイメージは異なるものの、宗教的とも言える色彩を帯びている点で共通するものがあると言うことができるだろう。

こうして、もし以上に考えたことが正しいとするなら、少なくともプラトンにとって、数学と哲学的問答法は、それぞれの知の向かうところのものをとっても、現代の我々が考えるほど懸け離れたものではないことになる。プラトンは、彼の考える真の世界を描き出すにあたって、数学の与えてくれるイメージを使うことができるだろう。さればこそ、プラトンは、

「われわれの主張では、およそ魂を強制して、魂が何としてでも見なければならぬところの、かの最も祝福された実在がある領域へと魂を向け変えさせるかぎりの学問は、すべてその目的(「〈善〉の実相を観てとることを容易にするという目的」)に寄与するものである」(VII. 526E)とすることができたのである。

V-1 この論文の最後に、「線分の比喻」の比例式、 $AC : CB = AD : DC = CE : EB$ を「似像(あるいは影)：原物」という観点から考えておきたい。我々の出発点は、ADとDCが実際の影(skia)などとその原物という関係にあるということであって、この関係をこれ以上に拡張することは、当然のことながら比喻あるいはイメージの問題ということになる。我々は、「影と原物」あるいはそれにつながるようなイメージを探せばよい。

まず、これまでに既に見たものが二つあって、いずれも「洞窟の比喩」の関係である。一つは、洞窟の囚人が見ている「影」であって、ここで付け加えておくと、彼らはただ影を見ているというのではなく、「影だけを真実のものと認める」（515C）のである。もう一つは、今の囚人の状態をも含めて、この比喩を4段階に区別したときに、その四つの段階が「影と原物、影と原物」という関係に立つというものであった（いずれについてもⅡ-2を参照）。この4段階の区別を、「線分の比喩」の4区分に一つ一つに対応させることはできなかったが、同じイメージの使用という点で、いわば文学的表現という観点からは、有意味であろう。「線分」も「洞窟」も比喩なのである。

また、洞窟の囚人が影だけを見ているという比喩は、これを可視界を表すAC全体を指すものと理解するとき、大きな意味をもって来る。線分の比喩では、「〈思わくされるもの〉の〈認識されるもの〉に対する関係がそのまま、似像の原物に対する関係と等しくあるように分割されている」（510A）という言葉によって、元来の影と原物の関係（AD：DC）が可視界全体と可知界全体の関係（AC：CB）に等しいという説明が与えられていたが、この可視界と可知界のそれぞれを、初出の第5巻末の議論に遡ると、可視界を対象とする〈思わく〉が、

「いろいろの美しい事物は認めるけれども、〈美〉それ自体は認めもせず、その認識にまで導いてくれる人がいても、ついて行くことができないような者は、夢を見ながら（onar）生きていると思うかね、目を覚まして（hypar）生きていると思うかね？まあ考えてみてくれたまえ。いったい、夢を見ている（oneirottein）ということは、こういうことではないだろうか——つまりそれは、眠っているときであろうと起きているときであろうと、何かに似ているものを、そのままに似像（homoion）であると考えずに、それが似ているところの当の実物であると思ひ違ひすることではないだろうか？」（V. 476C）

と説明され、可知界を対象とする〈知識〉が、

「〈美〉そのものが確在することを信じ、それ自体と、それを分けもっているものとを、ともに観てとる能力をもっていて、分けもっているもののほうを、元のもの自体であると考えたり、逆に元のもの自体を、それを分けもっているものであると考えたりしないような人、このような人のほうは、目を覚まして生きていると思うかね、夢を見ながら生きていると思うかね？」（476CD）

と説明されている。つまり、「線分の比喩」において可視界を表すACは、正確に言うとACに対応する精神の状態は、第5巻末では「夢を見ながら生きている」と表現され、「洞窟の比喩」では影をしか見ることのできない囚人の状態として表現されていることになる。しかも、「夢を見る」とは、似ているものをその実物と思ひこむことであり、影だけを見るときは、「影だけを真実のものと認める」（515C）ことなのであって、使われているイメージは違うけれども、両者が人間の精神の同じあり方を指していることに、疑問の余地はない。

しかも、我々が注意すべきは、「線分の比喩」の「〈思わくされるもの〉の〈認識されるもの〉に対する関係がそのまま（hos…huto）、似像の原物に対する関係と等しくあるように分割されている」（510A）という言葉が、〈思わくされるもの〉の〈認識されるもの〉に対する関係を元にして、それによって似像の原物に対する関係（ADのDCに対する関係）を言い表そうとしたものであって、

その逆ではないということである。第5巻末の、〈思わく〉と〈知識〉との間の「夢と覚醒」という関係が、「線分の比喩」の、実際の影と実物との関係に適用されることによって、それを媒介として、「洞窟の比喩」の、影しか見ない囚人のイメージへとつながっていく、と言えようか。「線分の比喩」におけるADとDCの区別あるいはその関係は、こうした媒介の役割を果たすものであると考えることができるであろう。いやむしろ、そのような役割を果たすだけ、と言うべきであろうか。

とすれば、我々に残された仕事は、可知界のCEとEBとの関係について、比例式に従って、それを「影と原物」あるいは元々の「夢と覚醒」の関係と考えることを許すようなイメージを探すことであろう。しかし、これについては、

「残るのは、ある程度実際に触れるところがあると言われた幾何学、およびそれにつづく諸学術であるが、しかしこれらの学術は、われわれの見るところでは、自分が用いるさまざまな仮設を絶対に動かさないものとして放置し、それらをさらに説明して根拠づけるということができないでいるかぎりにおいて、実在について夢みてはいる (oneirottusi) けれども、醒めた目で (hypar) 実在を見ることは不可能なのだ。なぜなら、そもその出発点として、自分がほんとうには知らないものを立てておいて、結論とそこに至る中間は、その知らないものを起点として織り合わされているとすれば、そのようにして得られた首尾一貫性が、どうして知識となることができようか？」(VII. 533BC)

という一節を引用するだけで十分であろう。

了 (1995. 9. 5)

[付記]

引用は、岩波文庫版『国家』(藤沢令夫訳)を用いた。

筆者は、1992年度までの5年以上にわたって、岩波文庫を使って『国家』を読むという形式で、教養部での哲学の講義を行った。そのお陰で、この大部な書物を毎年一度は通読する機会に恵まれたことになる。読書百遍義自ら見る、というけれど、この経験は筆者にとってたいへん貴重なものであった。今回の論文も、その折りの読書・勉強から生まれたものであることを、ここに書き記しておきたい。